

LingvoオクトM+

2024年10月7日

(月曜日)

イーグレ姫路四階第一会議室

10月例会

○詩

○川柳

○エッセイ・小説

Vol. 24



Vol. 24

10月7日（月）イーグレ姫路  
読書会講師：情野千里

次回11月11日（月曜日）  
会場：姫路アイメッセ予定  
読書会：講師未定

LingvoオクトM+の  
参加は自由です。斬新な作品を募集します。

世話人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani\_kk@yahoo.co.jp

11月の読書会をしていただく方を探して  
います。自薦、他薦問わず。

## 秋の蜘蛛

吉田ふみゑ

丸くて黒いクモ

黄色い縞の大きなジョウロウグモ

ジャンプの上手な五角形クモ

どこにでもいる足長の巣作り名人  
みんな箒ではたいしてしまえ

わたしが糸に引っかかる

蜘蛛たちが集まってくる

だから

エイ、と巣をつぶす

蜘蛛の巣に巻かれて

庭から出られなくなってしまう

だから目をつぶって

エイ、と巣をつぶす

どこからか聞こえてくる

知っているの

朝の蜘蛛は縁起が良い神様の使いだってことを

わたしの庭は蜘蛛の巣だらけ

透明な糸の向こう

朝日が遠い

## アメリカ南部人と日本人

モス堀渕敬子

私は、1989年5月から2012年6月までの23年間、アメリカにあるノースカロライナ州に住んでいた。そこは夫の故郷である。そこで一番に思ったことは、日本は太平洋戦争に負けて自信もプライドも失ってしまっただけで南部人はプライドを失っていないことだ。今でも北部人は、「Damn Yankee、へくそつたれヤンキー」と呼ばれて嫌われている。南部一の都会アトランタのあるジョージア州と鹿児島は姉妹盟約を結んでいる。片や南北戦争、片や西南戦争と同じころの内戦でどちらも負けているからだ。

私の母は昨年の9月に亡くなったが、看護師兼助産師だった。母は従軍看護婦になってお国のために尽くしたかったが、日本が負けたので助産師学校にも行かなかったという。母にとっては50年たとうが60年たとうが、日本は敗戦国だという。アメリカ南部ミシシッピ州出身の作家ウィリアム フォークナーは来日した際、ヤンキーと戦争して負けたということで南部と日本の運命は似ていると、言ったそうだ。

夫によると、南部人と日本人の性格も似ているという。どちらも保守的で、本音と建前があるというのだ。

1999年のワールドシリーズはニューヨークヤンキース対アトランタブレーブス  
で大いに盛り上がった。  
南北戦争はまだ続いているかのようにだ。

## 月と「書付」

※急逝した詩人Tの魂のために

高谷和幸

書付を懐に坂を超える。彼は何度も曲りくねった峠道を上って下ってきた。目線の高み、腰の沈み。伸びる手、立ち上がる足。実のところ彼は書付を見たことがないのである、その書かれたものが何を記したものか分からない。単に行くときにあつた頭上の月、帰るときの眼下の月かも知れない。凝視していると、茫洋として眼底の小さい孔へ光が壊れて吸い込まれる。亡失した太古の文字の記憶だろうな、と亡父が言う。首の長い壺の中にくねくねと文字が吸い込まれて、笛のような音、旧家の娘が「オナリ」になられて「くれ、くれ」と呼ぶ声が聞こえる。それは彼を攫いに来た仙女だね、と江戸から播磨に飛んできた寅吉が答える。おまえの書いた「わたし」をくれ、と言う。目を瞑って咏えて

いた彼に思い当たるところがあった。千種川、掛保川、夢前川と水の傍を通るときに「わたし」を待っていたあの女学生が仙女かもしれない。ある小説家が「わ、た、し」はほとんどが死者だと言っている。それなら書かなくなった「わたし」をやるよ。そう言うと、体が急に軽くなったが、何かズボンの裾がもそもそする。見るとカイワレ大根がびっしりと生えていた。「これはしめた」今夜の酒のあてにしよう。今から料理をするので、その間にガラス窓を少しあけて、メダカに餌をやつてくれ給え

※「私」の多くの部分が死者なんです。個別の「私」にはわからないはずの感覚、感性、認識を書いている。  
…古井由吉「文学の淵を渡る」新潮文庫より。

## 夜景

海林坐7日子

月かげのもと、海に降る雪のような、まったくの、しじまだね、ひたすものがうつつてゆく。あるいは（月やあらぬ春や昔の春ならぬ わが身一つはもと）の身にして、『伊勢物語』第四段のこの歌も、降りそそぎ、燠火のように、ちらめくともありました。きつかけのひとつを、すくつて、ひろげる。男と一緒に、夜の港を見ていた。ちろちろ、まって、耳元に彼の息を感じながら、かがやく、かげ、吸つて、当時のわたしは、夜のみせる景にひかれたのだ。だって、そのまえから、蛾のように、飛んで火に入る、子どもの頃の記憶に、さそわれ、じゅずつなぎに、いたからさ。夜の街に消えていった母、あかりに、あやしい、みせられ、ええ、しずかなんです。またたくのに、ざわめくのに。なぜ夜だったのか。かげたち、うずくまり、燠火、うめくよ。ひたすものたちが景にちらめく、からかもしれない。でも、聞こえない、（去年に似るべくもあらず）、後年、同じところを通ったけれど、弱まったかがやき、あとかたも。ああ、ひとりで見ているからか、（わが身一つはもとの）、なかしら。こなごな

の、雪のともるよう、わらうよう、降りて、のぼってくるものたちの、まっつよ。長いこと、積もってゆき、うせたあかりは、それでも溜まって。さめざめと、なんとしても大切に、蛾と蝶は似ているからさ、しまっつていったのでした。ひたされ、わが身ひとつに、なくなったものたち、海に降る、まっくらさのなか、雪の、ほのあかるいのは、どうしてなのか。てまねきされ、じゅつと音が、燠火になでられて重なってゆく。じゅずがほどけ、かつての風が耳をたぐった。つぎたし、飛んで火に入る、春や昔の、やっぱり、もとの身では、今はね。積もり、ひらひら、うつつたものたちが咳をする、そんなにぎわいが、よぎっていた。月のかげり、だいぶ、しずかだっただけでも、似るべくも、ううん、似ていたよ。むせることがあるのだろうか。降る雪に、声をもとめる人がいた、それも、すくいとる、わたし、たちだ。あるいは、のぼつて、漁り火のよう、あちらへ、街の灯も、ひらひら、こちらへ、たまっつていったのだろう。あかりは、ほんのり、いたむから、あたたかいのかもしれない。つがれ、蝶の、ねむつて、ちかちか、そんなふうに、港は、もはやうるさいぐらい、うん、聞いていたよ。胸のなかで、ふるい吐息をひたし、すこしだけ、うらがえす。かわつたのは、わが身でした。あらぬ、ある、占いのように、くべてみる。かすかな声の、くすぶるようです。

## 積み木

### しろやあきのり

休みの日、

それはギアを落とす大切な時間。

あくせくフルスロットルで走っていた日々はひとまずさようなら。

日常で浮かぶ、誰に言うのも面倒臭い、そんな瑣末なアイデアは、僕にとって、輝くノーベル賞もんの発明。

休みの日、

それは心に空白を作れる大切な時間。

言葉は介在しない。そうすると、ひとまず真理がわかったような気がする。  
そんな僕はお釈迦様。

あれこれ考え、組み立て、一棟の建物を作るようなそんな日々。  
建てたからには崩しちやならず。

そんな重圧が心の奥底に蠢き、居座るようになった。

そんな思いから解放される、休みの日。

何もかも忘れ、  
生に戻り、  
感覚を剥き出しにして、  
目覚め続けていたら、

希代の発明家にでも、  
お釈迦様にでも、  
何だっとなれる、  
そんな自己満足な、  
幸せに包まれる休みの日。

まるで、積み木を崩しては、  
笑っている赤子のように。

## 預言された都市の記憶の果て

千田草介

二億一千零八千七百四四面の都市設計図が惑星ケイト（計都）の洞窟で探査機ホルミスダスにより発見されたのはビッグバン紀元百三十八億五千六百九十二年のことである。

歴大な都市設計図は人種的にはホモ・サピエンスに属するたった一人のある預言者が書き残したものであった。性別定かならぬ彼（あるいは彼女）は名もわからないので、仮にトバと呼ぶことにする。というのも彼ないし彼女トバは七万四千年前のスマトラ島トバ火山の破局噴火によって人類の総人口が数千人という絶滅危惧種状態に陥った際に生きていたと考えられるからである。トバは火の神を信仰しており、その信仰告白が都市設計図のある一面に記述されてあった。人工衛星などない太古の時代にもかかわらず地球全体を俯瞰したとしか解せぬ地図の中心にはスマトラ島が描かれてあった。火の神の恩寵なのか劫罰なのか、トバは地球から計都星へと飛ばされ、九百六十九歳で死んだというメトセラも遠く及ばぬ七万四千年の余生を送る不老長寿の人、というより実質は不死の人と化した。それだけの時間があればこそ二億面を超える都市設計図は描けた。必要な数学物理学天文学等々の科学知識は火の神の眷属であろうか未来をつかさどる智慧の女神がトバの脳髄に啓示として送ってきた。計都星上のトバは生物学的な意味で生存していたのではなく、神秘学者がいうところのアストラル体として存在していたのであろう。計都星そのものも本来は印度神話の想像

上の天体であり実在の惑星として認知されたのは探査機ホルミスダスの発見によつてであつた。ホルミスダスはトバを認知できたのか？ そうであるともそうでないともいえる。トバの存在そのものが都市設計図に化してしまつたといつて過言ではないからである。ホルミスダスは洞窟内に入つて都市設計図を読み、工作機械を作つて自己複製をはじめた。やがて百万の都市が惑星上に誕生してゆくことになる。

## 雨

浜田多代子

狐の嫁入り  
パラパラ降り  
ポツポツ降り  
パチャパチャ降り  
ザーザー降り  
ジャージャー降り  
ガンガン降り  
ごく限られたところに  
局地的に降る雨  
昔から語られていた  
わ・た・く・し・あ・め  
貴方のところに雨が降ります  
スマホの通知  
どこだ どこだ

天を仰げば  
青空ばかり  
でも

近くの地域で  
わ・た・く・し・あ・め

雨は雨でも

台風さんまで連れ込んで  
雷さんまで暴れさせ

水があふれる迷惑降りに  
わ・た・く・し・あ・めは天邪鬼

天邪鬼は鬼  
鬼は嫌われっこ

嫌われっこ・・・悪いのは  
それはきつと きつと

人間だろ  
人間なんだ

## 垂涎抄・源氏物語―空蟬

瀬川健二郎

十七歳の源氏は紀伊の守の妻、空蟬と一夜の關係をもつ。空蟬の弟、小君を文使いとするため源氏は可愛いがる。空蟬は一転、厳しい態度で寄せ付けない。思ひ切れない源氏は、屋敷に忍び込み、小君に話しかける。その冒頭の一節。(源氏)「われはかく人に憎まれても慣らはぬを、こよひなむ、始めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくて、ながらふまじうこそ思ひなりぬれ」など宣へば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしとおぼす。手さぐりの細く小さきほど、髪のと長からざりしかけはひのさま、かよひたるも、思ひなしにや、あはれなり。あながちにかゝづらひたどりよらむも、人わろかるべく、まめやかにめざまし、と、思し明かしつゝ、例のやうにも宣ひまつはさず、夜ふこう出て給へば、この子は、いといとほしく、さうざうし、と思ふ。

「わたしはこんなに人に嫌がられたことは一度もありません。今晚、初めて世の中は嫌なものだと分かり恥ずかしくて、生きていけそうもない気持ちになりました」おっしゃると、小君は涙まで溢して寝ています。それを可愛いとお思いになられます。その肌の手ざわりが、ほっそりして小柄なところや、髪があまり長くはない点が姉君と似通っているのも、愛しさを募らせます。むりやり追いかけてまわし尋ねて行ったりしても、さぞ外聞が悪いことでしょう。心からひどい女と

思いながら夜を明かし、お帰りなされるので、小君は、お気の毒に思い、物足りなく寂しくなるのでした。

源氏と空蟬の心理描写が長けている。

女も、「なみなみならずかたはらいたし」と思ふに、御消息も絶えてなし。「おぼしこりにける」と思ふにも、「やがてつれなくてやみ給ひなましかば、うからまし。しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむも、うたてあるべし。よき程にて、かくてとぢめてむ」と思ふものから、ただならずながめがちなり。

その後、空蟬も一方ならず心が咎めていました。源氏の君からのお手紙もふつり絶えてしまいました。さすがにお懲りになつたのだと思ひながらも「このまま音沙汰なしでお終いなさつたら、なにか辛いでしょう。といつて、ご無理な堪らない、いなさりようが続くなら、これもいやなことだし、やはりこの辺りで密（みそ）かごとは止めなければ」思うものの、やりきれなくて物思いに耽ることが多くなるのでした。

そして源氏はあるうことか、紀伊の守の妹と関係をもつてしまふ。

（源氏）「人知りたる事よりも、かやうなるは、あはれも添ふ事となむ、昔人も言ひける。あひ思ひ給へよ。つゝむ事なきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくなむありける。又さるべき人人も許されじかし、と、かねて胸いたくなむ。忘れで待ち給へよ」など、なほなほしく語らひ給ふ。

（娘・空蟬の義妹）「人の思ひ侍らむ事の恥づかしきになむ、え聞こえさすまじ

きと、うらもなく言ふ。

(源氏)「なべて人に知らせばこそあらめ、この小さきうへ人に伝へて聞えむ。けしきもなくもてなし給へ」など言ひおきて、彼のぬぎすべしたると見ゆる薄衣を取り出で給ひぬ。

「世間が知っている仲よりも、こういうのは、ずっと嬉しいものだ、昔の人もいつています。あなたもわたし同様、愛してください。まったく人目を憚らないわけにもいきませんから、わが身としても思うままになりません。おうちの方々もお許しくださいらないかと、今から心配です。忘れないで待っていてくださいよ」と、おつしやられます。「人がなんと思うやら、恥ずかしゅうございますから、とてもお便りを差し上げられません」娘は心のままをいいます。

「誰かれなしにいつては困るが、この小さい殿上人に言伝(ことづて)を頼みましよう。素知らぬふりをなさいよ」いい残して、空蟬が脱ぎ捨てていった薄衣を取ってお出になりました。その薄衣を取る具体的な行動で、初めて「空蟬(蟬の脱け殻)」の深意を知るのでした。

うつせみの身をかへてけるこのもとに なほ人がらのなつかしきかな(源氏)

うつせみの羽におく露の木(こ)がくれて

しのびしのびにぬるゝ袖かな

(源氏)

「命短い蟬の羽におく露は、木の葉隠れの儂い身です。わたしも人目を忍んで、あなたを想いひとり涙の露に袖を濡らしております」引用・参考文献

(1) 玉上琢彌訳注『源氏物語』角川ソフィア文庫

(2) 瀬戸内寂聴訳『源氏物語』講談社文庫

## 張り扇が、作れない

情野千里

〈手足口講談〉と申すものを思いついてよりの苦心惨憺——。幼児が多く罹患する手足口病とは、何の関わりもないのだ。「手の舞い足の踏む所を知らず」ただ無我夢中、口舌の編み出す千言万語。ひたすら朗々とせつせつと断固毅然と講ずるゆえに、手足口講談を名乗る。演じるは千流斎ちり厘。初代の千流斎濃紫を後見に、LingoオクトM+10月例会にて初のお目見得を果たす所存……。読書会の外題は『情野千里の言葉大好き症候群を拗らせたこんな書物のこんな部分』。好きな作家の好きな作品はいっぱいあるので、どれを譜面台に置くか迷うくらいである。ただ、講談師がここぞと釈台を叩く、その張り扇の作り方が分からない。NHKでやっている『日本の話芸・講談』や『趣味どきっ！・源氏物語の女君たち』の画面を食い入るようにつめて、だいたいの形状は把握したが、「はて！ あれは何で出来ておるのか？」幼稚園のときにハサミが使えず、折り紙細工の代わりにちぎり紙細工を提出した私は、はつきり言って不器用なのだ。発表は明日に迫っている。「大丈夫か？ 私」

じつとしていた嫉妬している椰の樹

ねぶた祭りあんな女と観て来たか

落窪に一人暮らして鬼女となる

浮草の繁茂はげしき人嫌い

妖精の椅子とも違うツキヨタケ

同姓同名の椿一樹が枯れている

十七回忌の首のバロック真珠鳴く

夏椿お前も八十歳はちじゅうもつれかな

グランドサークルには乳房も含まれる

米喰う女の今日をはじめる四方拝

2024年10月7日(月)

## ラテンアメリカ文学

### 諸井 学

最近コロンビアのノーベル賞作家ガルシア・マルケスの『百年の孤独』が新潮社から文庫で発売されたと話題になっています。この本はおよそ五十年ほど前にわが国でラテンアメリカ文学のブームが起こったときに嚆矢となった本です。ラテンアメリカとはおおざっぱにメキシコ以南の南米大陸及びカリブ海地域と違ってよいでしょう。今回はその頃に世界を席卷した驚きの文学の話をしたと思います。

若い頃わたしはおもにフランス文学を中心に読書をしてきたので、サルトルやカミュの実存主義文学のあと、アラン・ロブ・グリエの『消しゴム』やナタリー・サロートの『見知らぬ男の肖像』など、ヌボオー・ロマンの作家たちの作品に親しみました。そこへ突然コロンビアの作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』が現れたのです。一読衝撃、むさぼるように読みました。南米にとんでもない作家がいる！これ以後わが国でもラテンアメリカ文学のブームが湧きおこりました。

『百年の孤独』はコロンビアのブエンディア一族が歴史の村マコンドを創設し、繁栄から滅亡までの百年間を舞台にしています。そして、そこでは一族の六世代にわたる人間模様が、人々の情熱、愛、復讐、孤独、衰退などを通して驚異的に描かれ、家族の物語を通じて人生の儚さや人間の業が深く探求されています。発売されるや世界各国でベストセラーになり、アルゼンチンでは初版八千部が二週間で売り切れたといわれていますが、わが国では一九六七年に邦訳が出版されて、重版がかかるまでに五年を要したらしいのです。わたしは一九七八年、二十八歳の時にこの本を読みました。そして一読驚嘆したのは先に話したとおりで

す。それまでにラテンアメリカ文学では、新潮社から豪華本《創造の小径》シリーズが発売され、ミゲル・アンヘル・アストウリアスの『マヤの三つの太陽』やオクタビオ・パスの『大いなる文法学者の猿』を読んで大いに刺激を受けました。そして『百年の孤独』が出版された後、国書刊行会から《ラテンアメリカ文学叢書》が出版され始め、アレツホ・カルペンティエール（キューバ）『時との戦い』、カルロス・フエンテス（メキシコ）『聖域』、また新潮社の《現代世界の文学》シリーズからマリオ・バルガス・リヨサ（ペルー）『緑の家』『都会と犬ども』、さらに集英社から《世界の文学》シリーズで、ホセ・ドノソ（チリ）『夜のみだらな鳥』、フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』（共にアルゼンチン）などが次々と翻訳出版されました。

彼らは若い頃にヨーロッパを席卷したシュールレアリスム文学に大いに刺激を受けましたが、ひとたび中南米の自らの身の回りの現実の世界を見つめると、そこがまさにシュールで驚異的な世界だったので。彼らが幼い時に聞いた祖母の話、民間に伝承されている神話や伝説などがすでに魔術的であり、自らに起こった身の回りのことを書いたりアリズム小説がまさに魔術的リアリズムと呼ばれるものだったのでした。彼らは国は違うが共通の言語であるスペイン語で書いたので、リアルタイムで互いの文学を共有したのでした。わが国のブームの時代では、ガルシア・マルケスやバルガス・リヨサの小説が次々と翻訳され、さらにアルゼンチンのエルネスト・サバト『トンネル』、マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』、アドルフオ・ビオイ・カサーレス『モレルの発明』などが紹介されました。

彼らは後に世界的な評価を受け、次々とノーベル文学賞を受賞しました。ラテンアメリカ（中南米）地区で受賞した作家を紹介します。

一九四五年 ガブリエラ・ミストラル（チリ）

一九六八年 ミゲル・アンヘル・アストウリアス（グアテマラ）

- 一九七一年 パブロ・ネルーダ（チリ）  
一九八二年 ガブリエル・ガルシア・マルケス（コロンビア）  
一九九〇年 オクタビオ・パス（メキシコ）  
二〇一〇年 マリオ・バルガス・リョサ（ペルー）

この中でホルヘ・ルイス・ボルヘス（アルゼンチン）が受賞していないのが返すがえす残念です。ボルヘスとサミュエル・ベケットは戦後の世界文学の進むべき方向性を示したといわれています。



QR コードをダウンロードして電子版を送れと明記の上通信ください。メールでお送りします。